
ポケットモンスター 幼馴染の受難 ~ School Life ~

風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター 幼馴染の受難 (School Life)

【Nコード】

N7789X

【作者名】

凧

【あらすじ】

これは『ポケットモンスター 幼馴染の受難』の学生時代の話です。ポケットモンスター 幼馴染の受難とは設定などが異なりますが、この話が完結したら改訂版を新たに投稿するので楽しみに待っています。

(注意) なお、それまで『ポケットモンスター 幼馴染の受難』は検索から除外します。

プロローグ（前書き）

舞台はホウエン。イツシユ地方のポケモンは登場しません。
学園の名前は次回登場します。

プロローグ

新たなクラスと学友に心を躍らせながら去年も通ったサクラが舞い散る道を再び歩く。

正面の掲示板には沢山の人ばかりが出来ており、その中の一人が振り向く。それは見知った元学友。

「よお！シズク今日から二年だな」

「そだな、スゲル」

「今掲示板見たけど俺達揃ってCクラスだ」

「そか、んじゃ今年もよろしく」

また同じクラスか・・・変わらないなあ・・・。

変わらない学友。変わらない教師。そして・・・

「・・・うおおおおおおお！！レンカさああああん！！」「」

「・・・おねえさま！こつちむいてえええ！ハジメさんもおお！」「」

変わらない黄色い声。

校門から二人の男女が歩いてくる。長い紅髪を靡かせてやってくる綺麗な少女、レンカ。僅かに緑が混じった短い黒髪の男から見てもかっこいいと思える少年、ハジメ。勉強もポケモンバトルの腕もトップクラスで校内の人気者の二人。

「相変わらずすげえなお前の幼馴染は」

「そだな。何で幼馴染なのか不思議だよ」

「さつき一緒に確認したけどあの二人はAクラスだったよ」

「うしー！」

「・・・お前だけだろうなあ。同学年でそんな反応するの」

小さくガッツポーズをすると隣が隣から呆れた視線を向けてきた。

「何言ってるんだよ。一緒にいても面倒事に巻き込まれるだけだぞ？」

学園に入る前は酷かった・・・何度あの二人関係で覚えの無い恨

みや嫉妬を向けられてきた事やら・・・。

去年も同じクラスじゃなかったから学園では関わらずに済んだし、家ではスグル達と遊んだりしてほとんど会わなかった。今年もそうなるといいなあ・・・。

「そういえば知ってるか？今年俺らの学年に二人編入生が来るらしいぜ？」

「へえ〜」

この時俺は知らなかった。この編入生が俺を騒動に巻き込む事も、それにより去年から関わりを断っていた二人と再び関わる事になるとは。

始業＋入学

『え〜新入生、在校生の皆さんおはようございます。只今よりホウエン地方立トウカ校の入学式兼始業式を始めたいと思います』

壇上の校長のそんな出だしから式は始まった。

このホウエンにある学校は入学式と始業式、卒業式と終業式が同時に行われる事でちよつと有名だ。

『校長先生のお話』

『生徒の皆さん、おはようございます。春休みの間ちゃんと・・・』

』

あ〜やっぱり先生の話って長いなあ〜。・・・ヤバ、眠気が・・・
ZZZ。

「・・・い、・・・きる・・・ク。シズク！起きろって！」

はっ！完全に寝てしまった。周りを見ると数クラスはすでに移動を始めていた。

「ん〜！サンキュースグル。うちの担任は誰になった？」

「去年と同じムタセンだ。ってかお前何時から寝てたんだ？」

「校長の『春休みの間〜』辺りから」

「ほぼ初めっからじゃねえか」

ムタセンとは去年俺達のクラスの担任だったムラタ先生の略称の事で、現在26歳独身（恋人はいるらしい）だ。

「そうそう、転入生の事も出て来たぜ。一人はうちのクラスでもう一人はAクラスだってよ」

「ふ〜ん。どんなんだった？」

「Aクラスの方は結構明るい雰囲気の子で、うちの方は可愛いけど若干近寄りがたい感じだ。しかも一つ下で飛び級してきたってよ」

「じゃあ頭も良いしバトルも強いのか。うちの主戦力だな」

「ああ、後でクラスで自己紹介すると思っぜ」

『2-C、退場して下さい』

放送と共にうちのクラスも移動を始める。

「よし！全員揃ってるな。俺はこのクラスの担任になった」「ムタセン……！」……まあ、初めての奴もそうじゃない奴もよろしく A-Dクラスの1クラス辺りのの人数は15〜20人程度。だが別に少ない訳じゃないむしろこの学年は多いくらいだ。大抵の奴は学校に入らず旅に出るやつばかりだからだ。

人数も少ないし自己紹介は彼女だけでいいだろう。白織、自己紹介するんだ」

「……はい」

ムタセン呼ばれ前に出たのは長い銀髪の女の子だ。身長は140cm程で育った様子の無い胸。……美少女というより美少女。確かに顔は整っているが、無表情なので若干近寄りがたい雰囲気だ。

「……白織 ユキハ、12歳……」

『白織って……』

『もしかしてあの白織！？』

白織と言えばシンオウを中心に世界的有名なデボンに並ぶ大会社の社長の名字だ。もしかして彼女は社長令嬢か？……ってあれ？何かこつちをじっと見てるような……？

（おいシズク。なんかお前のこと見てないか？）

（スグルもそう思うか？気のせいだと思ったんだが……）

隣のスグルが小声で話かけてきた。しかし俺には全く心当たりがない。

「ほらお前から静かにしろ。これからは同じクラスの仲間なんだから仲良く……って白織？」

ムタセンが諷める中、彼女は俺の前にやってきた。

「……え〜っつと？」

「・・・」

(おい! やっぱお前なんかしたんじゃないのか?)

(・・・覚えはないだが・・・ん)

「・・・た」

「ん? 今なんて?」

「・・・ようやく会えた」

ギョツ!!

「ハ?」

「『『『『『えっ!!!』』』』』」

・・・ナゼオレハハジメテアツタトシシタノヘンニユウセイニダ
キツカレテイル?

再会 + 過去

現在の状況：？固まる周囲　？固まる自分　？瞬きしているムタセン　？抱きついていて編入生以上。

スグルに視線を向けると奴は瞳で語っていた。

（おいおいシズク。どこでそんな綺麗な子と知り合ったんだ？）

その瞳に俺も返す返事をする。

（いや、全く覚えがないんだが！？）

（じゃあなんで抱きつかれてるんだよ！）

（・・・誰かと勘違いしてるのか？）

（（（（（それだ！！！！）））））

最後に俺達の視線の会話に入り込んできたのはクラスの男子達。

あいつ等は会話（視線による）に入ってくる前は俺に嫉妬の視線を向けていた。

（そうだ！そうに決まってる！）

（きつと俺と間違えたんだ！俺はあの子と（妄想の中で）会った

事がある！）

（それなら俺だって！）

（俺もだ！）

（（（（（・・・サイテー・・・）））））

あいつらは女子達が蔑んだ目で見ているのに気付かないんだろうか・・・？

「・・・あゝ、白織。崎下と知り合いかなのか？」

復活したムタセンが白織に質問する。あつ、ちなみに崎下は俺の苗字。

「ん・・・4年前に、シンオウのキツサキで・・・」

4年前のキツサキ？・・・銀髪の女の子？

・・・ポク、ポク、ポク、ポク、ポク、ポク、ポク、ポク、チー

ン！！

「ああ！あの時のイーブイの子！」

「（コクコク）」

俺が叫ぶと白織さんは嬉しそうに頷き、男子達は

「やっぱ知り合いじゃね〜か！！」

「許さん！！」

「殺す殺す殺す殺す（以下略）・・・」

嫉妬に狂っていた。

「なあ、どんな出会いだったんだ？」

興味が湧いたようでスグルが彼女との出会いについて尋ねてきた。

「ん〜。あれは4年位前、俺が7歳の時に家族でシンオウのキツサキ地方に行った時・・・」

「4年前 シンオウ地方・キツサキシテイ」

「・・・暇だ」

その日は家族旅行でキツサキシテイのキツサキ神殿を見に来たんだがジムの許可がいるらしく入れなかった。残念に思っていると親父が「すぐにキツサキのジムリーダーを倒して許可を貰ってくるからどこかで遊んでなさい！」と言ってジムに行ってしまった。

姉ちゃんは親父のバトルに興味があるらしく、母さんと一緒に親父について行き、俺一人が残された。

「さむっ！」

寒いならポケセン（ポケモンセンターの事）待ってればいいのに、当時の俺は何故か町の外に向かっていた。

町の外をブラブラしていると不意に啜り泣きが聞こえてきたんだ。

俺は声の方へふらふらと誘われるように向かった。するとそこには

「なんと！見事な冷凍ミカンが！」

「真面目に話せ（スパーン）」

スグルがどこからか取り出したハリセンで俺の頭をブツ叩いた。

・・・地味に痛い。

「まあ、そこにはイーブイを抱いた銀髪の女の子がいたんだ。まあ、多分白織さん。その後色々あって彼女と街に帰ったんだ」

「色々ってなんだ」

「色々は色々だ」

「・・・ふん、そっか」

スグルは何か察してくれたようだ。が女子の方々が若干不満そうだ。

「ん〜じゃあ、白織は崎下の隣だな。知らない人より知ってる人が近くにいた方が心強いだろ。崎下、放課後学校案内してやれ」

「へ〜い」

「んじゃ、明日について話すぞ。って言っても明日は部活動紹介があるだけだからしっかり準備するよう。んじゃ解散」

驚きの内容（前書き）

後書きにおまげがあります。

驚きの内容

「・・・で、ここが音楽室。後どこか知りたいところは？」

「・・・大丈夫」

「そつか。じゃあ帰るか」

「・・・待つて」

放課後、主な教室を白織さん案内し、帰ろうとしたところで白織さんに服を掴まれた。

「何？」

「・・・どうしてあの時の事、嘘ついたの？」

「・・・さっきの教室での話か。」

「別に嘘なんかついてないさ」

そう、俺は嘘はついてない。ただ白織さんが三匹の野生のポケモンに囲まれていた事を話していないだけだ。

「・・・じゃあ何で」「・・・きゃーーーーー（うおーーーーー）

ー！！」「」「・・・何？」

「ああそつか。今はポケバトル部の活動時間か」

「・・・???」

「うちの最も人気のある二人が所属している最も人気のある部活動丁度窓から見れるんじゃないか？」

現在俺達がいるのは校舎の三階。グラウンドで行われるポケバトル部（正式名称：ポケモンバトル部）のバトルがじっくり見れるだろう。

窓からグラウンドを見てみると予想どおりレンカのルカリオと八ジメのジュカインがぶつかり合っていた。

「ハオウ、接近して『ブレイズキック』！」

「リョクオウ、『かげぶんしん』で躲せ！」

脚に炎を纏わせた蹴りをルカリオが放つが、大量に現れたジユカインの分身をすり抜けるだけだった。

「それなら『はどうだん』！」

焦れたレンカは必中技である『はどうだん』を指示。ルカリオが生み出した波動の球は本物のジユカインに真っ直ぐ向かう。

しかし、それに対しハジメは冷静に対処する。

「『はどうだん』を切り裂け！『リーフブレード』！！」

ジユカインは腕の葉の刃を振り、『はどうだん』を真っ二つにする。切り裂かれた『はどうだん』はジユカインの後方で地面にぶつかり爆発した。

「・・・強い」

「うちの学校でもトップクラスの二人だからな。じゃ、俺は帰る」

「・・・私も」

「最後まで見ないの？」

「・・・充分」

一階に降りた俺達は、人の群れの後ろを通り校門から出た。

「・・・なあ、どこまで一緒に来る気？」

「・・・まだ」

さつきからずつとこの調子だ。

校門を出てからすぐに別れると思ったが、家と同じ方向らしくさつきからずつと一緒に歩いている。もうすぐ俺ん家なだけど・・・。

「・・・ん、此処」

「此処って・・・」

彼女が言う『此処』。・・・それは丁度俺ん家の真ん前につき最

近できた豪邸。ちなみに俺ん家の隣はレンカ。さらにその隣はハジメの家だ。

「それじゃあまた明日」・・・待つて・・・何？」

自分の家に入ろうとする俺を止める白織さん。一体何が？

「・・・兄さんと挨拶に行くから、ちょっと待つてて」

「は？」

小走りで家に入っていく白織さん。挨拶つて・・・。

「初めまして、向かいに引越してき白織です。私はユキトで、こっちは妹のユキハです。そちらのシズク君とは同じクラスだそうです」

「あら〜どうもご丁寧。私はシズクの母の崎下ユカリと言います。こちらはシズクの姉のミスキ。・・・ところで、ご両親は？」

「母は数年前に他界し、父はシンオウの本社にいますのでこっちにいますのは私たち二人だけです。」

「若いのに大変ですね」

「そちらの旦那様は？」

「主人は冒険家です。・・・今もどこかを旅してるんです」

現在、我家、崎下家（母さん、姉さん、俺）と隣に越してきた白織家（ユキハ、ユキト）でリビングで向かい合っている。

ユキトさんは短い銀髪の綺麗な男性で今年で17歳と若い、親にホウエンの支部を任せられている人で、世の女性が放っておかないだろう。

姉さんはユキトさんの一つ下の16歳。俺と同じ長い黒髪だが、姉さんは髪を上の方で纏めてポニーテールにしている。現在はポケモン保護官というポケモンを保護する仕事についている。

「さて、挨拶はこれくらいにして、本題を話そうか」

え？挨拶が本題じゃないの？

「安心してください。彼がユキ八の旦那になるということはあなた達も私達の家族。当然使用人をつけるので食事の心配も問題ありません」

「シズク！結婚式はどこですか？」

「切り替え早！しかも話も飛びすぎ！まだ結婚できる年齢じゃないぞ！？」

「それでシズク君、答えは？」

後ろでは母さんと姉さんが式場のパンフを見ながらどこがいいか探しているが、さつきも言った通りまだ結婚できる年齢じゃないから！

「ええつと、正直、白織さんは良い子と思いますけど恋愛感情は抱いてません。それなのに付き合う・・・ましてや結婚を前提じゃ白織さんに失礼だと思えます。それに俺にはなりたくないものがあるから・・・。だから・・・ごめんなさい」

「ちっ」

姉ちゃん、後ろで舌打ちすんな！

「ふむ。・・・合格かな（ボソツ）」

「へ？」

「確認するけど、君がユキ八にそういう感情を抱いたら別に構わないんだね？」

「白織さんがまだそう思ってたら・・・」

「そっか・・・ユキ八」

「・・・ん、頑張る」

「うん。後は自分で頑張るんだ。皆さん、これからもどうかよろしく願います。それでは」

「・・・さようなら」

最後にそういって白織兄妹は帰って行った。・・・とりあえず「飯の準備するか」

驚きの内容（後書き）

おまけ ～ユキ八の受験前（ユキト視点）～

明日はいよいよユキ八のトウカ校の受験だ。あそこにユキ八の初恋の少年が通っているらしい。

合格間違い無しの筈なんだがユキ八は何か悩んでるようだ。無表情だが兄である僕には分かる。一体何を……？

「ユキ八、何を悩んでるんだい？」

「……兄さん」

ユキ八は一瞬迷ったようだが真っ直ぐ僕に目を向け言った。

「……年下の同級生と後輩、どっちが萌える……？」

「……ユキ八がおかしくなったぁー！ー！ー！ー！」

結局、長く一緒にいられる同級生にしたらしい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7789x/>

ポケットモンスター 幼馴染の受難 ~ School Life ~

2011年11月26日03時54分発行